2021(仏暦2564)年 6月号（第117号）

万行寺寺報

Mangyoji Jiho

発行
浄土真宗本願寺派 万行寺
住職　山﨑信充
〒385-0003
長野県佐久市下平尾４６１－１
電話　0267-67-2460

■住職法話
仏（ほとけ）さまと等しくなる
■浄土真宗 (新)仏事のイロハ
■本願寺の本
CD「みんな花になれ」
■編集後記

年忌法要表

1周忌	2020(令和 2)年	23回忌	1999(平成11)年
3回忌	2019(令和 1)年	25回忌	1997(平成 9)年
7回忌	2015(平成27)年	27回忌	1995(平成 7)年
13回忌	2009(平成21)年	33回忌	1989(平成 1)年
17回忌	2005(平成17)年	50回忌	1972(昭和47)年

住職法話

仏さまと等しくなる

今月の法語

信心というのは
凡夫が
仏さまと同じ命を
共有するという出来事

この法語は、奈良県の浄土真宗本願寺派のお寺の住職を務められた大峯顕先生の『生命環流 浄土和讃を読む 下』に出てきます。浄土真宗を開かれた親鸞さまの著「浄土和讃」について書かれたものです。その中の、

信心よろこぶそのひとを
如来とひとしとときたまふ
大信心は仏性なり

仏性すなはち如来なり

という和讃について述べられた中にあります。

この和讃に言われているように、阿弥陀如来を信じお念仏をよろこぶ人は如来に等しいのです。煩悩具足罪悪深重の凡夫であっても阿弥陀さまにまかせたら、その人の心は如来さまと等しい。これはつまり、その人は死なない命をいただいているということです。阿弥陀さまがそのようにおっしゃっているのです。**信心というのは、凡夫が仏さまと同じ命を共有するという出来事**です。共生と言ってもいいでしょう。われわれが生きているというのは、実は如来さまの命を生きさせてもらっているということです。如来さまは如来さまの無限の命を生きていても、私は一人で死ななければならないと思うのであれば、それは信心ではなく疑い心であります。

私は普段の仏事のご法話で、親鸞さまのお弟子の唯円の著『歎異抄』から、浄土真宗、親鸞さまの教えを一言で表現されている次のお言葉を頂いてお話をします。

本願を信じ
念仏もうさば仏になる

『歎異抄』第十二章の中に出てきます。阿弥陀さまの「必ず救うぞ」「救わずにはおられない」という本願のお心を一つの疑いもなく信じ、そのはたらきに報謝の念仏申すところに、私たちは浄土に仏さまとして生まれることが定まる身を既に頂いているのです。亡くなってどこに往くのかわからないから、迷わないように願うことではなく、浄土真宗は心安らぐ教えを頂いているということをお伝えしています。

先生のお言葉を頂きますと、阿弥陀さまのお救いにおまかせ（信心）すれば、私たちの心は仏さまと等しくなる出来事なのです。

ご縁を慶び、お念仏とともに
親鸞聖人御誕生 850 立教開宗 800

浄土真宗 ㊐仏事のイロハ

二、葬儀を行う
―悲しみを超えて―

【葬儀の意義】

なぜ葬儀を行うのか？

人の死は、いつどんなかたちで訪れるかわかりません。東日本大震災では、多くの人びとが津波に流され、行方不明になっている方もまだおられます。家族にとっては、その方の死を認めることはなかなかできないのが現実だろうと思います。今もどこかに生きているかもしれない。今も助けを求めているかもしれないと、それが気になり、いつまでも心が落ち着きません。

震災の行方不明者、犠牲者だけの話ではありません。かつて、わずかな遺品と紙切れ一枚で戦死を告げられた遺族も大勢いました。また日航機事故で、遺体の一部しか見つからなかった遺族には、御巣鷹山のどこかで亡き人が生きているかもしれないという幻想に苛まれる方がおられるかもしれません。

さらに言えば、生活をともにしてきた親、あるいは子が死を迎えても、なお依然として再び目をさまし、食事をし、玄関から出ていく姿を脳裏に甦らせて、もう二度と口を開くことなく、動き出すことがないと、きっぱりと割り切ることができる人は稀なのではないでしょうか。つまり、状況に差があるにせよ、総じて、親しかった人の死を心乱すことなくすんなりと受け入れることは、私たちにはなかなか難しいということです。

そんな「生」に執らわれ、死の現実から目を逸らせがちな私たちに、（亡き人も含めて）一つのけじめとして死を受け入れさせ、一歩前に進む契機を与えるのが葬儀です。葬という字は、原野に屍を安置するかたちですが、これは放置するのではなく、遺体の変わりゆくすがたを直視し死を受け入れる行為を意味します。また屍や死という字は、残骨を拝するかたちの象形文字です。すなわち、亡き人の死を受け入れ、今後は亡き人を敬うべき存在として崇めていくことを表すのが「葬」という言葉です。

したがって、葬儀とは、亡き人のいのちを死で終わらせることなく、普遍的な価値を持って関わり続ける存在と私たちが受け止めていく儀式と言えるでしょう。人は葬儀を行うことによって、悲しみや悔恨の情を超え、それぞれの人生の次の一歩を踏み出すことができるのです。

ポイント

▼死で終わらせるのではない

▼葬には崇め敬う意味がある

［「浄土真宗 ㊐仏事のイロハ」末本弘然著／本願寺出版社刊より］

～本願寺の本～

CD「みんな花になれ」

親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要記念
愛唱歌
浄土真宗本願寺派・龍谷山本願寺（制作）1,100円（税込）

浄土真宗本願寺派（西本願寺）において、2023（令和5）年にお迎えする親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要を機縁として制作された愛唱歌「みんな花になれ」を収録したCD。愛唱歌の一般公募において入賞した2作品を同時収録。それぞれカラオケバージョン付。

歌唱は愛唱歌の審査委員長である加藤登紀子さん。

収録内容　①みんな花になれ　②つなぐ命　③おくりもの

（本願寺出版社ホームページより）

編集後記

梅雨の時期、紫陽花（あじさい）が似合います。◆雨期（うき）が長いインドでは、お釈迦（しゃか）さまは一ヵ所に弟子と一緒に集まられ、勉強会を開き出歩かないようにされました。それは、様々な生き物も芽生える時期で、知らぬ間に生き物を踏み殺してしまうことを防いだのです。この時期は、今でも安居（あんご）といって僧侶の勉強会が開かれています。梅雨はお坊さんが勉強する時期でもあります。◆門信徒会の年会費をお願いする時期になりました。会員各位におかれましては、引き続きのご協力をお願い申し上げます。